

文字通り純白の白鳥は、いつの時代も人々に夢を与えます。とくにヨーロッパでは童話というかたちで「鶴から子へ」と語り伝えられたかすかすの美しい物語が、白鳥の保護に役立ってきたこともまた、確かではないでしょうか。

日本で白鳥の保護の古いかたちは、神の使いとしての例が青森県小湊にあり、ここでは一貫して保護されていますが、ほかのところでは保護が認められていた時代があり、白鳥がおちつて暮せるようになったのはごく新しく、昭和十六七年ごろ、新潟県の新潟湖で給餌に成功した吉川重三郎氏故人の努力によるころが多いのです。この成功に力を得て、各地で給餌が行われるようになったのは昭和三十代のなかごろからで、日本人と白鳥との良好なつきあいができるようになったのは、つい最近のことなのです。

低い繁殖率

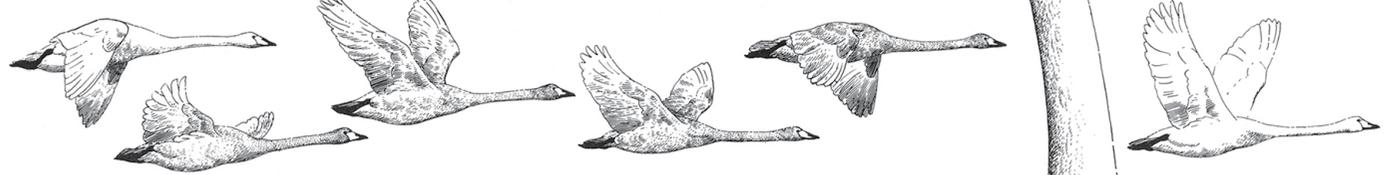
ヨーロッパでコフクハクチョウの研究によると野生の状態と産卵した二、四〇〇個のうち、一、〇〇〇個がヒナになり、三月月後には五〇〇羽、一年後には三、五〇〇羽、二年後には二、四〇〇羽に減ってしまうそうです。(ほかの動物のヒナに比べると多いとしても)そして繁殖できるようになる四百日を迎えるのは二、五羽。ふつと、産卵数六個、年一回の繁殖というところを考えると、四〇〇個が八〇羽の親鳥が、四年後に残せる子孫は、たったの二、五羽ということになり、生まれて十年を越えるような成鳥は、三、五羽しませんが、越冬地日本での保護策こそ、

保護のすずんだヨーロッパでさえ、自然環境のなかでは現状を維持するのがやっとで、やたらには増えないというところがこれによくおわかりと思います。コフクハクチョウよりもっと北の厳しい環境で繁殖しているオオハクチョウやコチヨウでは、これ以上の繁殖率を望むことはできませんから、越冬地である日本でも、よほどの保護策をもち立てない限り、増えることはないでしょう。日本に渡ってくる白鳥たちの繁殖地であるシベリアの中部や北部の自然環境が、まだ開発の手が及んでいないところを考えると、越冬する地でのつきあい方が、白鳥の敵にこれほど大きな影響をもっているか、ということもまた、私たちに課せられた大切な問題なのです。

法人日本鳥類保護連盟

サントリー株式会社

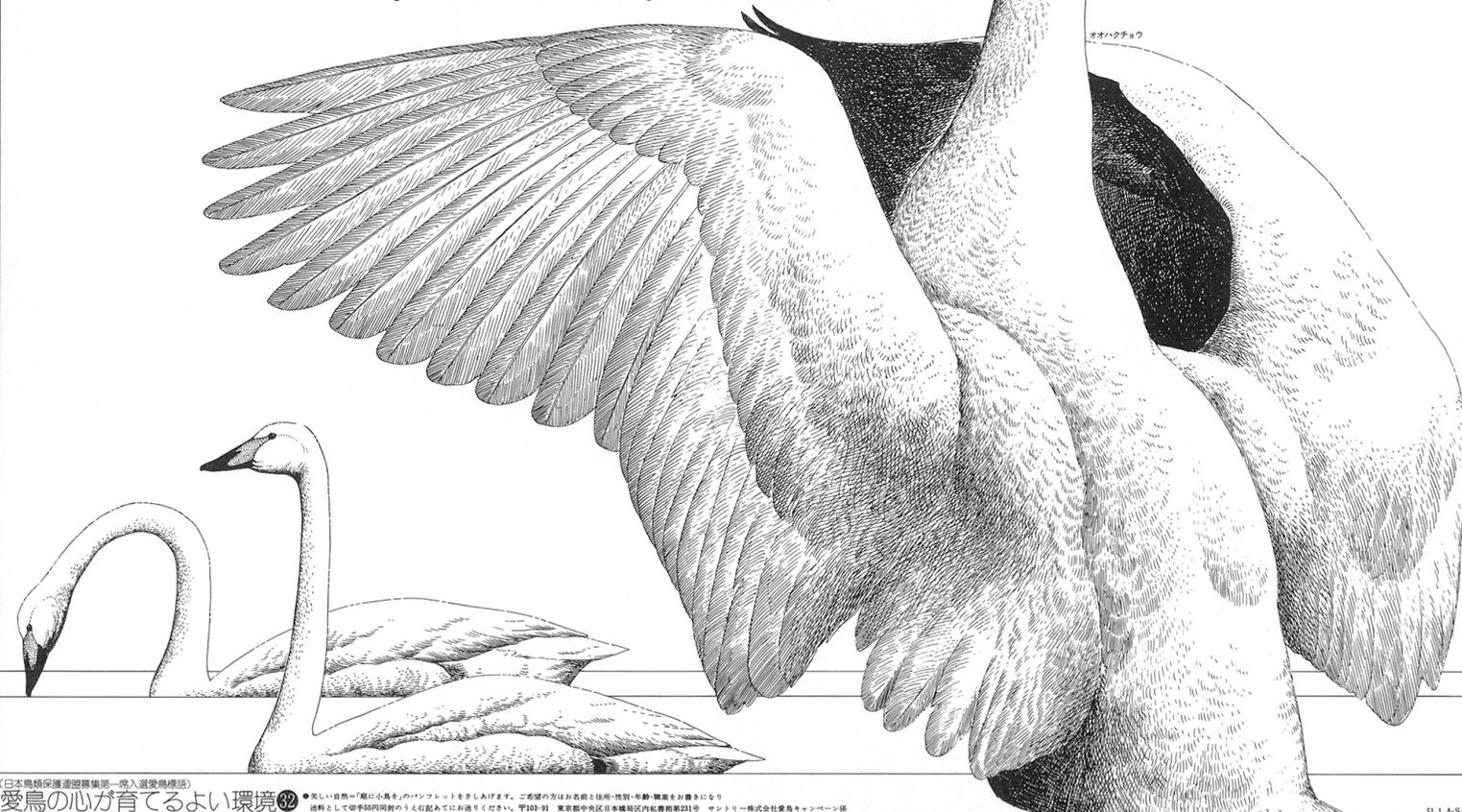
この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の啓蒙を目的として、サントリー株式会社が行ったもので、サントリー株式会社は、この啓蒙活動に一切の費用を負担していません。



純白の使者たち

●幼鳥は全体にグレー色をしていて、成鳥とは色が違う。それでも、シベリアで生まれて約半年の体をいっぴいに使って、親鳥と共に渡って来る。若鳥は、体の色は一応は白くなるがクチナシなどに若さが残る。

オオハクチョウ



【日本鳥類保護連盟第一発行 啓蒙用紙】
●美しい自然へ「鳥の小鳥」のプレゼントをさしあげます。ご希望の方はお名前と住所・性別・年齢・職業をお書きになり、送料として切手58円同封のうえ右記までにお送りください。〒100-91 東京都中央区日本橋区区内私権部第231号 サントリー株式会社愛鳥キャンペーン課